

池田家文庫資料叢書 3

御留帳評定書

下

岡山大学出版会

池田家文庫資料叢書3・下巻の刊行にあたって

国立大学法人岡山大学附属図書館

館長 今津 勝 紀

岡山大学は新制大学として発足して六八年となりました。多くの人びとに支えられて、今や、十一学部、七研究科、三研究所、大学病院、附属学校を備え、二万人の学生、留学生、教職員が、日々知的創造に取り組む日本屈指の総合大学に発展しています。

岡山大学は、「高度な知の創成と的確な知の継承」を大学の理念に掲げ、知の創成、知の継承、つまり研究・教育活動を通して社会に貢献することを使命としています。

とりわけ近年では、「自律的な学習と研究の実質化」を重視して「実りの学都」を実現しようと努力しています。附属図書館もその実現のための活動を支援し推進する機関として、多様な学習・研究の場として変貌しようとしています。

「実りの学都」は世界に飛翔する大学です。と同時に、みずから培われてきた地域の文化的伝統

を引き継ぎ、「地域に開かれた」大学でなければなりません。岡山は江戸時代の岡山藩以来、学問を重視する伝統を有し、幸いなことに、その活動を伝える岡山藩政資料は、池田家文庫としてわが岡山大学附属図書館に所蔵され、本学はもとより国内外の研究者によって活用されてきました。

附属図書館では、この池田家文庫の活用をはかるために、開館以来さまざまな取組をおこなってきました。こうした活動が評価されて、昨年には二〇一七年度岡山市文化奨励賞を与えられました。ここに至るまでの多くの関係者のご尽力に敬意を表するとともに、その思いを受け継いでいかなければならないと決意を新たにいたしております。

平成二十二年（二〇一〇）から始められた「池田文庫資料叢書」の刊行も、そうした活動の一つであります。昨年度からは、その3として「御留帳評定書」を刊行する運びとなり、昨年は『御留帳評定書』上巻を刊行いたしました。そして今年はその下巻を刊行することができました。この資料は今から三百五十年ほど前の岡山地域の状況と岡山藩のそれへの政策対応を知ることのできる貴重な資料です。そこからは現代の諸問題に対処するためのさまざまな示唆が得られるものと確信します。この資料集が国内外の多くの人びとによって利用され、知的な交流が広がることを期待いたします。

平成三十年二月

目次

池田家文庫資料叢書 3・下巻の刊行にあたって…………… (i)

目次…………… (iii)

細目次…………… (v)

凡例…………… (x)

付図…………… (xiii)

六	御留帳評定書	延宝四年		(1)
七	御留帳評定書	延宝五年		(98)
八	御留帳評定書	延宝六年		(221)
九	御留帳評定書	延宝七年		(337)
十	御留帳評定書	延宝八年		(441)
あ	とがき			(540)

御留帳評定書 下巻 細目次

六 延宝四辰ノ年 御留帳評定書

正月晦日	近藤角兵衛番	(1)	七月廿一日	水野作右衛門番	(45)
二月十日	長屋新左衛門番	(5)	七月十日	近藤角兵衛番	(44)
二月廿一日	近藤角兵衛番	(10)	六月晦日	水野作右衛門番	(43)
二月廿九日	近藤角兵衛番	(13)	六月廿一日	近藤角兵衛番	(42)
三月十日	近藤角兵衛番	(19)	五月晦日	水野作右衛門番	(41)
三月廿一日	近藤角兵衛番	(21)	五月廿一日	近藤角兵衛番	(40)
三月晦日	近藤角兵衛番	(24)	五月廿九日	山田弥太郎番	(39)
四月十日	近藤角兵衛番	(27)			
四月廿一日	近藤角兵衛番	(29)			
四月晦日	近藤角兵衛番	(30)			
五月廿一日	山田弥太郎番	(31)			
五月廿九日	水野作右衛門番	(38)			

七 延宝五巳ノ年 御留帳評定書

正月十日	近藤角兵衛番	(98)
正月廿一日	山田弥太郎番	(101)
正月晦日	近藤角兵衛番	(107)
二月十日	山田弥太郎番	(115)
二月廿一日	近藤角兵衛番	(118)
二月廿九日	山田弥太郎番	(122)
三月廿一日	山田弥太郎番	(127)
三月晦日	山田弥太郎番	(131)
四月十日	山田弥太郎番	(131)
四月廿一日	長屋新左衛門番	(132)
五月十日	山田弥太郎番	(132)
五月廿一日	長屋新左衛門番	(135)
五月廿九日	山田弥太郎番	(139)
六月十日	長屋新左衛門番	(139)
六月廿一日	山田弥太郎番	(146)
六月晦日	長屋新左衛門番	(147)

七月廿一日	山田弥太郎番	(156)
八月十日	長屋新左衛門番	(158)
八月廿一日	山田弥太郎番	(160)
八月晦日	下濃宇兵衛番	(171)
九月十日	長屋新左衛門番	(174)
九月廿一日	下濃宇兵衛番	(177)
九月晦日	山田弥太郎番	(180)
十月十日	長屋新左衛門番	(181)
十月廿一日	下濃宇兵衛番	(183)
十月廿九日	山田弥太郎番	(187)
十一月十日	長屋新左衛門番	(194)
十一月廿一日	下濃宇兵衛番	(196)
十二月十二日	山田弥太郎番	(200)
十二月廿一日	下濃宇兵衛番	(207)
十二月廿八日	長屋新左衛門番	(209)
壬極月十一日	山田弥太郎番	(212)
壬十二月廿一日	下濃宇兵衛番	(215)

八 延宝六年ノ年 御留帳評定書

正月十日	山田弥太郎番	(221)
正月廿一日	長屋新左衛門番	(227)
正月廿九日	下濃宇兵衛番	(232)
二月十日	山田弥太郎番	(233)
二月廿一日	長屋新左衛門番	(240)
二月廿八日	下濃宇兵衛番	(242)
三月十日	長屋新左衛門番	(246)
三月廿一日	下濃宇兵衛番	(247)
四月十日	長屋新左衛門番	(248)
四月廿八日	近藤角兵衛番	(257)
五月十日	長屋新左衛門番	(259)
五月晦日	下濃宇兵衛番	(260)
六月十日	近藤寛兵衛番	(262)
六月廿一日	長屋新左衛門番	(264)
七月十日	下濃宇兵衛番	(273)
七月廿五日	日置左門宅ニ而寄合	(274)

七月晦日	長屋新左衛門番	(275)
八月十日	近藤寛兵衛番	(278)
八月十六日	日置左門宅ニ而内寄合	(279)
八月廿一日	長屋新左衛門番	(280)
八月廿五日	池田大学宅ニ而内寄合	(282)
八月晦日	下濃宇兵衛番	(285)
九月十日	近藤寛兵衛番	(286)
九月廿一日	長屋新左衛門番	(288)
九月廿九日	下濃宇兵衛番	(289)
十月五日	池田大学宅ニ而内寄合	(289)
十月十日	近藤寛兵衛番	(291)
十月廿一日	長屋新左衛門番	(296)
十一月十日	下濃宇兵衛番	(296)
十一月十六日	日置左門宅ニ而内寄合	(308)
十一月廿一日	下濃宇兵衛番	(310)
十一月廿五日	池田大学宅ニ而内寄合	(312)
十一月晦日	近藤寛兵衛番	(313)

極月五日 日置左門宅ニ而内寄合

無之、書載落着仕義も無之候

(322)

十二月十日

長屋新左衛門番

(327)

卯月廿八日

日置左門宅ニ而寄合

(368)

十二月十六日 池田大学宅ニ而内寄合

卯月晦日 寄合有之候得共、書留申儀も無之

(332)

十二月廿一日

下濃宇兵衛番

(333)

五月十日

長屋新左衛門番

(369)

九 延宝七未ノ年 御留帳評定書

正月廿一日

近藤寛兵衛番

(337)

六月十日

長屋新左衛門番

(379)

正月廿九日

長屋新左衛門番

(343)

六月廿九日

山田弥太郎番

(373)

二月十一日

下濃宇兵衛番

(345)

七月十日

近藤寛兵衛番

(392)

二月廿一日

近藤寛兵衛番

(346)

七月廿一日

山田弥太郎番

(395)

二月晦日

長屋新左衛門番

(349)

七月廿八日

長屋新左衛門番

(396)

三月十日 日置左門宅ニ而寄合

近藤寛兵衛番

(359)

八月十日

長屋新左衛門番

(401)

三月廿一日

近藤寛兵衛番

(361)

八月廿一日

長屋新左衛門番

(405)

三月廿五日 日置左門宅ニ而内寄合

長屋新左衛門番

(363)

八月廿九日

長屋新左衛門助番

(407)

三月廿九日

長屋新左衛門番

(364)

十月十日

山田弥太郎番

(412)

四月五日 日置左門宅ニ而内寄合

近藤寛兵衛番

(367)

十月廿二日

長屋新左衛門番

(414)

卯月廿一日 日置左門宅江寄合有之候得共、為差御用も

十月廿八日

長屋新左衛門番

(417)

十二月十日
十二月廿一日
山田弥太郎番
近藤寛兵衛番
(426) (435)

十 延宝八申ノ年 御留帳評定書

正月廿二日
正月廿八日
長屋新左衛門番
山田弥太郎番
(441) (443)

二月十日
二月廿一日
近藤寛兵衛番
長屋新左衛門番
(450) (453)

三月十日
三月廿一日
山田弥太郎番
近藤寛兵衛番
(454) (458)

三月廿八日
三月十日
山田弥太郎番
近藤寛兵衛番
(458) (460)

卯月廿一日
卯月廿八日
山田弥太郎番
近藤寛兵衛番
(462) (463)

五月十日
六月廿九日
下濃宇兵衛番
山田弥太郎番
(464) (467)

七月十日
近藤寛兵衛番
(469)

七月廿一日
七月廿八日
八月十日
壬八月十日
九月廿一日
十月十一日
十月廿一日
十月廿九日
十一月十日
十一月廿一日
十一月廿六日
十二月十日
十二月十六日
十二月廿一日
十二月廿七日
下濃宇兵衛番
近藤寛兵衛番
下濃宇兵衛番
近藤寛兵衛番
下濃宇兵衛番
山田弥太郎番
近藤寛兵衛番
下濃宇兵衛番
山田弥太郎番
近藤寛兵衛番
左門宅二而内寄合之節
近藤寛兵衛番
(470) (475) (477) (482) (486) (488) (490) (493) (500) (503) (506) (508) (511) (514) (517)

凡例

一本書は岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫に収められている「御評定書」二冊（総目録番号E3-1-2）「御留帳評定書」一二冊（E3-3-14）のうちの二〇冊分を翻刻し、『池田家文庫資料叢書3・御留帳評定書』として刊行するものである。全体は大部なので、上下二分冊とし、上巻には寛文八年～延宝三年（E3-1-5）、下巻には延宝四年～延宝八年（E3-6-10）をそれぞれ収める。

一目次・細目次はその分冊のものである。細目次は評定開催日を項として立てた。

一解説は上巻にまとめて記した。

一翻刻にあたっては、できるかぎり原本の体裁を再現するように努めたが、紙面の都合上、または読みやすさを考えて、変更を加えたところもある。改行はいちいち指摘せず、闕字・平出は一字あけで示した。

一表紙は、およその形状を罫線枠で囲んで示した。朱書された貼紙の内容は、「」を付けて記し、右肩に（貼紙朱書）と注記した。

一付紙は、おおよその場所に※印を付け、その付近に内容を「」を付けて示し、（付紙）と注記した。

一史料本文の字体は原則として常用漢字を用い、異体字・略字・俗字・あて字については一部を使用し、必要に応じて通用の文字を右行間に（）で示した。地名などの表記が通用のものと異なる場合、適宜現行の文字を同様に（）で示した。

一史料を読みやすくするために、適宜、読点（、）、並列点（・）を付けた。

一明らかに誤字・誤記と思われるものは、右行間に正しいものを（ ）で示し、疑念が残る場合は（カ）とした。脱字と思われるものは（脱）（脱力）、重複していると思われるものは（衍）（衍力）とした。意味不明の場合は（ママ）、記載がなく空白となっているところは（アキ）とした。

一変体かなは平かなに改めたが、格助詞のうち次の文字と、接続詞の「并」は活字を小さくして使用した。

者（は） 江（え） ニ（に） 茂（も） 与（と） 而（て） 而已（のみ）

一くりかえし記号は、「ゝ」（漢字）、「ゝ」（ひらかな）、「ゝ」（カタカナ）、「く」（二字以上の熟語）を用いた。旧字・古字のうち、次のものは新字体に改めずにそのまま使用した。

龍 瀧 籠 嶋 寫 餘 飭 宜 富 舛 燈

一異体字・俗字・略字・合字については、次のものを使用した。

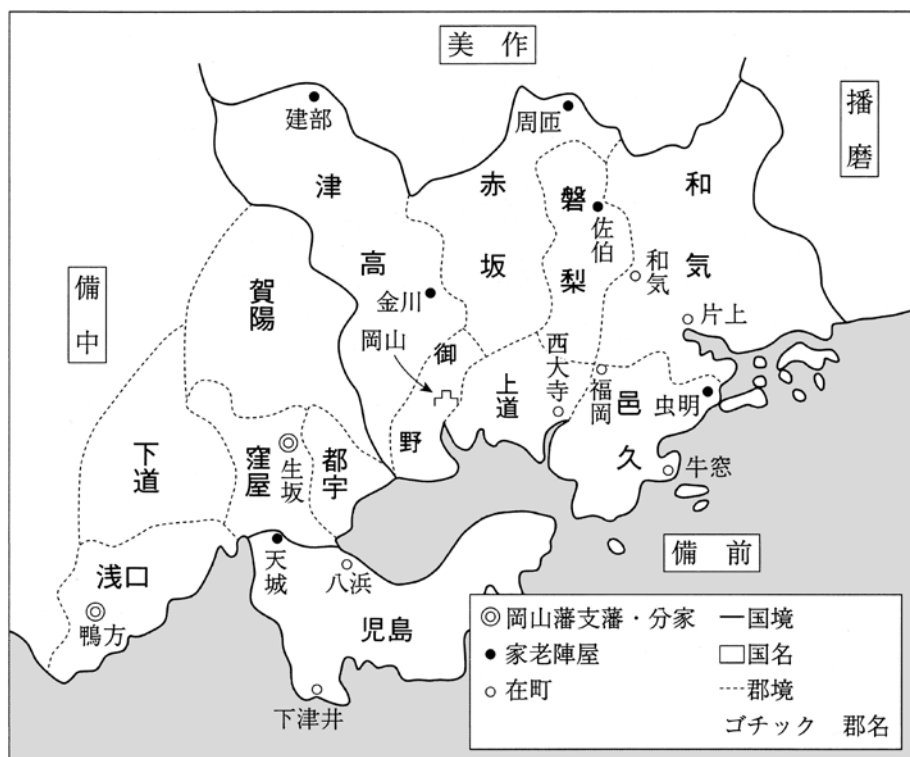
玠（珍）	躰（体）	悴（悴・悴）	躬（悴）	噉（扱）	并（并）	荔（州）	吳（異）
早（畢）	粮（糧）	扣（控）	帑（紙）	欵（歟）	取（最）	牢（牢）	哥（歌）
沉（沈）	磯（磯）	泚（とて）	斛（石）	脉（脈）	吡（嘩）	桧（檜）	俣（儘）
虵（蛇）	藺（園）	鴈（雁）	闢（闢）	メ（しめ）	才（等）	分（より）	

一江戸時代には制度的・慣習的な身分や格式が存在しており、現代からみれば差別的な事実や言動、用語などが一般に通用していた。そのため史料のなかには、そうした表現や事実が記載されていることもあるが、正しい歴史認識を形成するためには、史料に基づいて歴史的な事実を明らかにする必要があるとの立場から、そのまま掲載した。ただし、固有名詞との関連で現在の差別を助長しかねない場合は記載を差し控え、□□で示し

たところがある。

一本叢書の企画・編集は、岡山大学貴重資料刊行推進会（平成29年度、岡山大学附属図書館館長今津勝紀、同副館長李禎之、岡山大学社会科学文化科学研究科教授山本秀樹、同准教授三宅正浩、同准教授徳永誓子、教育学研究科准教授村井良介、岡山大学特命教授（研究）倉地克直、附属図書館学術情報サービス課長森谷めぐみ）が行った。

一本書の原稿作成・原本との照合・割付・校正は青木充子と倉地克直が行った。解説は倉地が執筆し、全体の監修を倉地が行った。



岡山藩領地図

あとがき

『池田家文庫資料叢書3 御留帳評定書』は当初上・中・下の三巻構成の予定でしたが、諸般の事情により、上・下二巻での刊行となりました。お詫びいたします。収録できなかった天和元年～貞享二年（E3-11-14）および「大寄合之覚書」（E3-22）については、別のかたちで提供できる方途を探りたいと思います。

出版事情が厳しいなか、下巻の出版にご尽力くださいました岡山大学附属図書館今津勝紀館長をはじめ関係者の皆さま、および文学部日本史研究室の皆さまに、心から感謝いたします。池田家文庫の史料の利用は、マイクロフィルムでの閲覧や複写の提供が中心となりますが（附属図書館のホームページをご覧ください）、今後ともその利活用の推進に努力したいと思います。

末尾ながら、編集・校正など全てにわたってお手伝いいただいた青木充子さん、版組など無理な注文を聞いていただいた友野印刷の皆さま、日頃からお世話になっている附属図書館利用者支援グループの皆さまに、感謝の意を表します。

歴史に学んで未来に生きようとする世界の人びとの交流の輪が広がることを願って。

平成三〇年（二〇一八）二月

倉地克直

池田家文庫資料叢書3

御留帳評定書 下

二〇一八年二月二五日 初版第一刷発行

編者 岡山大学附属図書館貴重資料刊行推進会

(監修 倉地克直)

発行者 横野博史

発行所 岡山大学出版会

岡山県岡山市北区津島中三丁目一番一号

TEL 〇八六(二五)七三〇六

FAX 〇八六(二五)七三一四

<http://www.lib.okayama-u.ac.jp/up/>

印刷 友野印刷株式会社

岡山県岡山市北区高柳西町一番二三号

ISBN978-4-904228-58-6 C3021

落丁・乱丁本はお取替いたします。
本書の無断複写は著作権法上の例外を除き禁じられています。

池田家文庫資料叢書の刊行にあたって

国立大学法人岡山大学

学長 千葉 喬 三

岡山大学は、昭和二十四年（一九四九）に戦後の復興を願う地元岡山の人びとのあつい期待を受けて、新制大学として創立された。当初は五学部であったが、現在では七研究科・一一学部を擁する総合大学として発展を遂げ、平成二十一年（二〇〇九）には創立六〇周年を迎えた。これを機に「西日本の学都」としてのさらなる飛躍を期しているところである。

本学の創立にあたっては、地元の有志の方々が「岡山総合大学設立期成会」を設立され、物資の乏しい時期に教育・研究環境の整備のために多大のご尽力をいただいた。その後の本学の発展も、そうした地元のご支援の賜物である。この支援に応えるために、さまざまな地域連携を進めることは、本学の重要な課題だと考えている。

池田家文庫も、教育・研究の資材の一つとして池田家のご厚意と「期成会」のご努力によって本学に寄贈されたものであり、岡山大学附属図書館に所蔵している。池田家は江戸時代に岡山地域を領地

とした大名であり、その文庫は質量ともに全国有数の大名家資料として国内外に広く知られている。これを本学での教育・研究に活用するとともに、広く一般の利用に供することは、本学に課せられた責務である。そのため、大学創立一〇周年を記念した展示会以来たびたび公開の機会を設けるとともに、最近では藩政文書のマイクロフィルム化や絵図類のデジタル画像化などの事業を附属図書館として実施し、利用の便宜を図ってきたところでもある。

池田家文庫の貴重資料の刊行は、三〇年ほど前に一時期行われたが、その後は長く途絶えていた。しかし、貴重資料の刊行は池田家文庫の活用うえで欠かせないものであり、継続的な取り組みが重要な事業である。本学では平成一九年（二〇〇七）に岡山大学出版会を設立したが、このたび創立六〇周年記念事業の一つとして「池田家文庫資料叢書」を出版会から刊行することとした。この叢書の刊行によって、池田家文庫の価値がますます高まることであろう。本叢書が多くの方々によって利用され、日本歴史を解明する一助となることを願ってやまない。

平成二十二年二月